
セビーリアの理髪師

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セビーリアの理髪師

【Nコード】

N4985G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アルマヴィーヴァ伯爵は町娘サンナに御執心。何とか彼女と結婚しようとするが邪魔が二人も。それでいつも助けてもらっている理髪師のフィガロに助けを求めて。ボーマルシェの三部作のはじまりの作品をロツシーニがオペラにした作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

第一幕 騒動のはじまり

十八世紀終わり頃のスペインの港町セビーリア。スペインの乾いた街並に立ち並ぶ白い家達。道の広さも長さもまちまちで家々はその道を囲むようにして建っている。その家々の間に僅かな広場がある。その広場において一人の着飾った若者がいた。

「ここでもいいのだな？」

「はい」

黒い豪華な絹の服に白いズボンと編み上げ靴を身に着けている。黒い上着には銀で様々な刺繍が施されていてそれがみらびやかに見せている。黒い髪を奇麗にまとめて髭も剃ったその顔は黒くはつきりした彫のある目もあり実に若々しい端正なものであった。

「こちらでございます、アルマヴィーヴァ伯」

「名前は呼ばないでくれ」

伯爵と呼ばれた彼は咎める目で青と赤の派手な服の従者に言った。

「今はな」

「失礼、それでは」

「わかつてくれたらそれでいい」

彼が謝ったのを見てそこまで許した。穏やかでかなり高い声である。

「それでだ。用意はできているのか？」

「今できました」

彼はそう伯爵に言う。

「もう何時でも」

「有り難うフィオレルロ」

彼の名を呼んで礼を述べる。

「それではこれを」

「はい」

チップを出し手渡す。フィオレルロも笑顔でそれを受け取る。

「まずはこれだ」

「後でも貰えるのですか？」

「それはこれからの働き次第」

伯爵はくすりと笑って述べる。若々しい晴れやかな笑顔である。

「わかったな。では働いてくれよ」

「わかりました。それでは」

彼は後ろに立つ楽師達に顔を向けて言う。

「いいですか皆さん」

「はい」

「何時でも」

既に楽器や合唱の用意を済ませていた楽師達は彼に答える。

「演奏できます」

「さあ、今こそ」

「わかりました。では伯爵」

フィオレルロは彼等の言葉を聞いてから伯爵に顔を戻した。

「いけます。さあ」

「わかった。それでは」

伯爵もそれを受けて唄いはじめる。それはカヴァティーナであった。

「東の空が微笑み美しい曙の光が差し込む。それなのに貴女はまだ目覚められないのですか？」

「貴女はまだ目覚められないのですか？」

演奏も行われる。合唱も行われる。

「さあ愛しい人よ目を覚まして。そうして私をお救い下さい」

「私をお救い下さい」

「愛しい人よ」

「ああ、愛しい人よ」

伯爵は合唱団と声を合わせる。そうして歌を続ける。

「悩みを和らげ苦しみから解放して下さい。貴女の笑顔で」

見ればある白い家の二階の窓に向けて唄っている。そこに誰がいるかのよう。

「むっ」

ここで彼は何かを見た。

「見えた」

「誰がですか？」

「彼女が」

そうフィオレルロに述べる。

「彼女があゝの窓にいた。見えなかったか？」

「そうでしょうか」

だがフィオレルロは首を傾げてそう答えるのであった。

「私には見えませんでした」

「そうか。ではないのか」

彼の言葉にいささか気落ちする。だが歌は続けた。

「しかし。それならば余計に」

「その意気です」

フィオレルロは横から彼を応援する。主を。

「さあまた」

「うん。私が欲しいのは愛の一時」

「私が欲しいのは愛の一時」

また合唱団と一緒に唄う。

「その甘い嬉しさに比べられるものはない」

「その甘い嬉しさに比べられるものはない」

甘いカヴァティーナが終わった。伯爵はフィオレルロと楽師達を

回りに集めた。

「今日も御苦労」

「いえいえ」

「今日も出られませんでしたね」

「時間が悪かったか？」

伯爵はその窓を見ながら言う。じっと見据えている。

「明け方というのは」

「そうは思いませんけれどね」

それにフィオレルロが答える。

「そろそろ起きられる時間ですし」

「そうだよな」

「なあ」

楽師達も彼のその言葉に頷く。

第一幕その二

「まあこんな日もあります」

「また明日ですよ」

「そうか、明日もあるか」

伯爵は彼等の言葉を聞いてまずは気を取り直した。

「ではまた明日な。それでは今日の謝礼だ」

財布を一つ丸ごと渡す。フィオレルロと楽師達に。

「これで美味しい酒と料理でも楽しんでくれ」

「どうも」

「それでは」

彼等は上機嫌で去って行く。これまで以上に騒がしくなっているのは機嫌をよくしたからであろうか。伯爵はそんな彼等を見送ってから一人去ろうとする。その時だった。

「ラララレーーーーラ、ララララ」

「むっ!？」

突然何処からか明るい歌声がした。ギターの音も聞こえる。

「ラララレーーーーラ、ララララ」

「あの歌声は」

伯爵は今の歌声に聞き覚えがあった。それでそちらに耳を澄ます。

「さあ街の何でも屋に道を開けてくれよ」

「あれはフィガロか」

出て来たのは白い上着にダークブラウンの洒落たチョッキにズボンを身に着けた小粋な男であった。人懐っこい四角い顔をしており眉が細い目は穏やかで細い。黒い髪は丁寧に後ろ気味に撫でつけられている。背は高くそれも彼をかなり目立たせていた。

「そういえば理髪師になったと聞いているな」

実は伯爵は彼を知っている。以前何年かの契約で雇っていたのだ。契約が切れた時にまた雇おうと思ったが先に理髪師に引き抜かれた

のだ。頭の回転が早く器用でかなり使える男だ。

「歌の邪魔だな」

ここで伯爵は彼に氣を使った。

「暫くは」

彼が自分を見つけて氣を使って歌を止めないように物陰に隠れた。
フィガロはなおも歌い続ける。

「夜が明けた店に急げ。そうして今日も楽しい人生を過ごそう」

そう陽気に歌う。ギターを奏でながら。

「腕のいい床屋にとっては最高の人生さ。剃刀も鋏もメスも全部持っている」

この時代理髪師は外科医や骨接ぎのようなこともしていた。あの赤青白の理髪師の看板は静脈と動脈、そして肌を表わしているという。カストラートの去勢の手術もしていたのだ。

「それで品のいい素晴らしい仕事ができる。上流階級の方々とも知り合いになれるし街の皆がおいらを慕う」

「相変わらずだな」

伯爵はそんなフィガロの歌を聞いて呟く。

「できるようだな」

「御婦人も子供も御年寄りも娘さんも鬘に髭に」

ここで演技をはじめ。

「フィガロ！」

「ここにあります」

フィガロが呼んでフィガロが答える。

「鬘を」

「髭を」

「蛭を」

「はい」

「どうぞ」

「こちらです」

一人芝居を続けながら唄う。上機嫌で。

「忙しい忙しい。けれどまた」

また自分の名を呼んで答える。

「フィガロ！」

「こちらに」

「フィガロ！」

「こちらに。ああ、本当に何て忙しいんだ！」

また上機嫌で叫ぶ。これも芝居だ。

「おいらは稲妻みたいに動く町の何でも屋。全く素晴らしい幸福者だよ。おいらがいなければセビーリアの娘さんは誰だって嫁にはいけないし後家さんは再婚できないしね」

「そうなのか」

歌が終わったと見た伯爵がさっと彼の前に出て来た。

「おや、これは伯爵様」

「フィガロ、久し振りだね」

まずはにこやかに挨拶をする。

「元気そうで何よりだ」

「いや、伯爵様も」

フィガロはにこやかに笑って伯爵に洒落たお辞儀をする。伯爵も優雅な動作でそれに返す。

「お元気そうで何よりです」

「相変わらず何でもできるみたいだな」

「ええ、まあ私のできる限りは」

笑って謙遜してそう述べる。

「幸せに生きておりますよ」

「ふむ。そうか」

「それでどうしてこちらに？」

フィガロは伯爵に問い返した。

「朝早くから。まさか朝帰りとか」

「馬鹿を言え」

フィガロの小粋なジョークに苦笑いを浮かべながら応えて言う。

第一幕その三

「それはないさ。むしろそうなればどれだけ有り難いか」

「ではそうなることをお望みですね」

「その通りだ」

伯爵も警戒に彼に言葉を返す。

「実はこの前とても美しい娘さんを見掛けたのだ」

「ほう」

伯爵の言葉を聞いて楽しそうに声をあげる。わざとギターを鳴らして囃し立てにする。

「それはよいことで」

「少し前このセビーリアに引っ越してきた頑固者の医者の養女らしいんだ」

「頑固者の医者といいますと」

それを聞いてフィガロの顔が微妙に動いた。伯爵もそれを見て彼がその頑固者の医者について知っていることを見抜いた。

「知っているのか」

「知っているも何もあれでしょ？」

また伯爵に尋ねてきた。

「この家の」

「そう、この家だ」

今さつき伯爵が窓に向かって歌を唄ったその家である。

「この家の娘さんだ。どうにかして一緒になりたいのだが」

「ううむ、それは運がいい」

「運がいい？私がか」

「そうです。まさにマカロニの上にチーズが落ちてきたとはこのことです」

日本では棚から牡丹餅という意味になる。思わぬ幸福というものは何時でも何処でもあるということなのである。

「実は私はこの家の理髪師なんです」

「えっ、そうだったのか」

「しかも鬘屋であり」

鬘に関することも理髪師の仕事だったのだ。他には。

「外科医であり植木屋であり薬剤師であり獣医でもあります」

「本当に何でも屋なんだな」

「そういうことです。つまりこの家に関しては何でも知っているんです」

「何と運がいい話だ」

伯爵は自分で自分の幸運に感謝して言葉を漏らした。

「しかもあの娘ですよ」

「そっ、あの人だ」

伯爵は顔を前に出させて応える。

「あの人についても知っているんだね、やっぱり」

「勿論です。それではですね」

「うん」

「まずはここは」

「どうするんだい？」

「お任せ下さい。伯爵様の為なら」

自分から協力を申し出てきた。

「一肌も二肌も脱ぎますから」

「全く運がいいことだ」

伯爵はまた自分の幸運に感謝した。

「フィガロに会えたおかげで。上手くいきそうだ」

「しっ」

だがここでそのフィガロに静かにするように言われた。

「お静かに」

「どうしたんだい？」

「上の窓が開きます」

窓の上を指差して言う。その窓が。

「ここは隠れましょう」

「そうだな。それじゃあ」

「ええ」

伯爵はフィガロの言葉に従い建物の中に隠れる。するとそれと入れ替わりに窓から一人のうら若き美女が姿を現わした。

縮れた黒い髪を上でまとめた黒い瞳の女だった。小柄で浅黒い肌が如何にもスペインの女である。いささかふつくらとした顔は優しげでありそれでいて知的なものさえ漂っている。はつきりとした大きな目が印象的である。白い服が実によく似合っている。

「声が？」

「彼女だ」

伯爵はその女を見上げて言った。

「彼女こそ私の女神、そして宝なんだ」

「そうだったのですか、やはり」

「うん。だが」

ここでフィガロに言う。

「あの頑固者の医者もいるんだろうな、やっぱり」

「その頑固者の医者が出て来ましたよ」

フィガロは上を見上げて伯爵に述べた。

「ほら」

「むっ」

見れば白い髪を被った恰幅のいい男がバルコニーに現われた。白い髭を丁寧につक्सで固めやたらとキザでみらびやかな服とズボンである。貴族そのものといった感じの服装と容姿であった。品も知性も確かにあるがそれ以上にユーモラスが漂う男であった。

「彼ですよね」

「そう、彼だ」

伯爵は忌々しげにその男を見上げて答えた。

第一幕その四

「ドンッバルトロだったな」

「そう、ドンッバルトロです」

フィガロはまた答える。

「御用心を」

「そうだな。いや」

伯爵は女とバルトロの動きを見ていた。バルトロは何か大袈裟な仕草で彼女に声をかける。勿体ぶっているがそれもやはりユーモラスである。

「ロジーナ」

「はい」

彼女はバルトロに名を呼ばれて応える。少し低めだが澄んだ綺麗な声である。

「何か手に紙を持っているが。それは何かな」

「アリアです」

ロジーナは答える。一人で唄う歌だというのだ。これをアリアと呼ぶ。

「アリアか」

「はい。無駄な用心という」

「無駄な用心」

バルトロはそのタイトルを聞いて首を傾げさせる。傾げさせながら記憶を辿るのだった。

「どのオペラのだったかな」

「御存知ありませんか？」

「最近のものはな」

バルトロはここでいささか機嫌の悪そうな顔を見せてきた。

「あまり知らないのだ。墮落したからな」

「そうでしょうか」

「そうだ」

機嫌をさらに悪くした顔になって答える。

「カストラートも少ないしな。どういうわけか」

「それがいいのではないでしようか」

「よくはない。やはりカストラートこそが」

カストラートにやけにこだわる。この時代はまだカストラートが存在していて人気だったのだ。廃れるのはフランス革命以降である。

「ないとはな。全く啓蒙主義よ」

「あらっ」

ここでロジーナはふと声を出した。それはバルトロにも聞こえる。

「大きな声を出すとはしたくない」

「アリアを書いた紙を落としてしまったの」

実はわざとである。彼女はもう伯爵達がいる場所を知っている。

それでわざと落としたのである。これは彼女の思惑があつてのことである。

「どうしましょう」

「わしが拾って来よう」

バルトロは名乗り出てきた。

「それでいいな」

「御願いできますか？」

「無論だ」

ここではジエントルマンになって答える。

「それではな」

「有り難うございます」

礼を述べたが心の中では舌を出している。そうして下にいる伯爵に顔を向けた。すると目と目が合った。偶然ではなかった。

「彼女が僕を見ているな」

「間違いありませんね」

フィガロは伯爵にそう答える。

「それでは。宜しいですね」

「ああ、迷うことはない」

そうフィガロに答える。

「では、行くか」

「はい。それでは御供します」

二人はロジーナの目で考えを読んですつと前に出た。そうしてバルトロがあれこれ紙を探している後ろを通って家の中に入ったのであった。

すぐに階段を昇りバルコニーのある白い部屋に入る。女性らしい装飾が所々にある。その部屋のバルコニーの入り口に彼女はいた。

「ようこそ」

笑顔で二人を出迎える。

「お待ちしていましたわ」

「御会いしたかったです」

伯爵はフィガロを連れて恭しく挨拶をする。

「貴女に」

「私もです」

ロジーナはにこやかに笑って伯爵に応えた。

「ずっと気付いていました」

「ずっとですか」

「はい。ですか機会がなくて」

ここで悲しい顔を作って伯爵に見せてきた。

「ですが。今は」

「はい、こうして御会いできました」

顔をあげ述べる。朗らかな顔で。

「これは神の御導きでしょう」

「そう。だからこそこの機会を上手く使いたいのです」

ロジーナは伯爵の顔をじっと見て言うのだった。

「貴方のことを。知りたいのです」

「私のことをですか」

「そうです」

ロジーナはまた伯爵に答える。

「宜しいですか？ 貴方のことを」

「どうする？」

伯爵はロジーナの言葉を受けてフィガロに小声で囁いた。

「ここは正直に」

「いえ、ここは様子を見ましょう」

フィガロはそう伯爵にアドバイスをした。

「様子を見るのか」

「そうです、今のところは。御身分も隠して」

「わかった」

フィガロの言葉を受け入れて頷いた。

第一幕その五

「ではここはそうしよう」

「はい。むっ」

フィガロは誰かの気配を感じた。

「戻って来た！？」

「そうみたいです」

ロジーナも鋭い顔になって彼等に応える。

「バルトロがか」

「はい。ここは隠れましょう」

フィガロは今度はそう助言する。

「カーテンの奥にでも。それでは」

「うん」

二人はすぐにカーテンの中に隠れた。するとバルトロがすぐに中に入ってきた。

「ロジーナ」

「見つかりましたか？」

「それはすぐにな」

何か引つ掛かる物言いであった。ロジーナもそれに気付く。

「何かありましたか？」

「人の気配がする」

部屋の中を見回しながら述べた。

「おかしいな。気のせいかな」

「気のせいですよ」

ロジーナは笑って彼に答える。

「どうしてこの部屋に他人が来るのか」

「それもそうか。他に来るのはバジリオ位だ」

「はい」

「今日来るしな。それに」

部屋を去りながら呟く。丁度二人が隠れているカーテンの側を通る。

「彼女との結婚は今日中に決めてしまおう」

（何！？）

伯爵は今の言葉にすぐに反応した。だが声には出さずバルトロが出た後でカーテンの中でフィガロに対して言うのだった。

「今日中だと。ふざけるな」

「まあ落ち着かれて」

フィガロはまずはそんな彼を宥める。

「興奮されると周りが見えなくなりますから」

「わかっている。だがバジリオというのは誰だ？」

「ロジーナさんの音楽教師です」

フィガロはまずはこう説明した。

「音楽教師なのか」

「かなり変てこな。口が滑って生真面目で高尚ぶっていてそれで抜けていて」

「それはまたかなり変わっているな」

「はい。それでは次に本題に戻りますが」

「それだ」

伯爵は冷静な顔に戻って言うのだった。

「僕はやはり彼女に身分や名前を話したくはない」

「それはまたどうして」

「純粋な愛を確かめたい。身分や名前に捉われずにだ」

真顔で言う。純粋な顔をしていた。

「駄目か？それは」

「いえ、そうでなくてはなりません」

フィガロもまた真顔で彼に答える。

「またそうでなくては私もお助けしがいありませんよ」

「済まないな、本当に」

微笑んで彼に礼を述べる。

「そう言ってもらえると何よりだ」

「はい。それではですね」

ずっと今まで手に持っていたギターを出す。それと共にカーテンをめくって再び姿を現わす。

「はじめますか」

「何をだい？」

「名乗りの歌です」

上機嫌にそう説明する。目の前には当のロジーナがいる。

「宜しいですか、御準備は」

「ああ、何時でもいい」

伯爵はそうフィガロに答える。

「だから。さあ」

「はい。それでは」

フィガロは伯爵の言葉を受けてギターを弾きはじめる。伯爵はイタリア風のカンツォーネを優雅に唄いはじめたのであった。

「若し貴女が私の名前を御知りになりたいのであれば」

「知りたいのであれば」

ロジーナはその曲をじつと聴いていた。目が潤んできていた。

「是非私の唇からお聞き取り下さい。私の名はリンドーロ」

「リンドーロ様ですか」

「そう、それが私の名です」

唄いながら答える。

「貴女を心からお慕いしてまして生涯共にいたいと思っています」

「生涯ですか」

「そうです」

このうえない愛の告白だった。

「ですからこうしていつも朝から夜まで貴女の名を呼び続けているのです」

「そうだったのですか」

「私には何もありません」

これは嘘だった。あえて隠しているのだ。

第一幕その六

「ですが貴女に心を贈りましょう」

「心を」

「誠実な変わることもなき愛に燃える魂はこうして朝から晩まで貴女をお慕いしているのです。その私の心を貴女に」

「私が受け取っているのですね」

「そうです」

彼はまた告げる。歌ではなく言葉で。歌はもう終わっていた。

「宜しいでしょうか」

「はい」

ロジーナは天にも昇らんばかりの晴れやかな顔で彼に答えた。

「是非。お願いします」

「それでは」

伯爵はロジーナの愛を確かめた。それで前に出ようとするがここでフィガロに呼び止められてしまった。すぐに彼に顔を向ける。

「どうしたんだい？」

「一旦退きましょう」

こう言うのだった。

「またそれはどうして」

「今バルトロ先生はドン・バジリオを呼びに行っています」

「それは知っているが」

「そこに私達がいればことです。下手をすれば警察沙汰です」

「警察！？警察なら」

「伯爵」

警察なら言うことを聞くと言おうとしたところでそれをフィガロに止められた。

「それ以上は」

「おっと、そうだったね」

言われてそれに気付く。

「それじゃあ」

「一旦戻って変装しましょう」

「変装をかい」

「そうです。あの二人を油断させるような」

フィガロはそう提案するのだった。

「それでどうでしょうか」

「そうだな」

伯爵は顎に手を当てて考える。それから答えるのだった。

「今ここにいるよりはいいな。じゃあそうしよう」

「はい。では一旦ここを出しましょう」

「わかった。ではセニョリータ」

ロジーナに顔を向けて言う。

「一時お別れです。それでは」

「すぐに戻って来て下さいますので」

「当然です」

この問いに対する答えはもう決まっていた。それで彼は答えた。

「それではほんの一時のお別れを」

「はい」

「ではこれで。ところでだ」

伯爵はロジーナに挨拶をした後でフィガロに顔を向けて問うた。

「何に変装するんだい・それが問題だが」

「兵隊です」

フィガロはそう答えた。

「今日連隊がこの街に着きましたね。ですから兵士に化けましょう」

「ああ、それはいいね」

伯爵はフィガロの提案に納得したように頷いた。

「それなら怪しまれないし。それに」

「それに？」

「あそこの連隊長は僕の友人なんだ」

「それは余計にいい」

フィガロは伯爵と連隊長の関係を聞いて笑顔を見せてきた。

「軍服が簡単に手に入りますね。それだと」

「そうだろう？じゃあ早速行くか」

「そうしてお金を忘れずに」

「うん」

これは絶対であつた。やはり金なくては何にもできないからだ。こうしたところに抜け目がないのがやはりフィガロであつた。

「宜しいですね」

「わかつた。では金貨をどっさりとな」

「私にも幾らか」

「わかつてるさ」

人懐っこい顔を見せるフィガロに心得た笑顔で応える。

「それじゃあまずはこれで。しかし」

部屋を出ながらちらりとロジーナを見る。まだ彼を熱い眼差しで見ている。

「何という素晴らしい恋の炎。私を焦がして私以上のものにしてみせる」

「金貨のじゃれつく音がもう聞こえる」

フィガロもフィガロで言う。こちらはお金だつた。

「何といういい音だ。それが目の前に」

「私の心に染み透る神の恵み。これこそが私を燃やし尽くして私以上のものにする」

「ポケットに落ちるその金貨。それがおいらをおいら以上のものにしてしまう」

そんなことを呟きながら二人は消えた。そうして部屋にはロジーナ一人になつたのであつた。

「この心の中に一つの声が響き渡って私を傷つけた」

一人になつた彼女はうつとした顔で呟く。

「傷つけたのはリンドー口。それを許す方法はただ一つ、リンドー

口を私のものに」

彼女も彼女でそれを願うのだった。心から。

「それをきつと果たすわ。バルト口おじ様は反対しても何があるうとも」

言いながら手鏡を出す。そうしてまた言うのだった。

第一幕その七

「私は気立てもいいし行儀もよく素直で優しくて可愛らしい。きつと望むものは手に入るわ」

若い娘らしく朗らかな言葉であつた。

「そんな私の弱みに付け込むな蛇になつてやり返すから。そうして幾らでも計略を巡らせてあの方を手に入れてみせる。そう、どんな計略でも」

不敵な笑みだつた。それは今までの朗らかな笑みとはまた違ったものだつた。

「手紙を書いてそれをあの方に渡して。気持ちはお互いわかつたけれど手紙も」

この時代手紙は絶対的なものだつたのだ。ラブレターの威力は絶大なものだつた。

「フィガロさんにお渡しして。本当にあの方がいてよかったわ」

「ロジーナさん」

そんなことを言っているところだつた。バルコニーの下からフィガロの声がした。

「あら、もう戻つて来たの」

ロジーナは朗らかな笑顔に戻つて声の方に顔を向けた。

「随分早いわね」

「おられますか？」

「はい、ここに」

バルコニーから顔を出して応える。

「早いね、随分」

「足を飛ばしてきました」

フィガロは笑顔でロジーナを見上げて言つた。

「おかげでへとへとですよ」

「あら。じゃあチップを弾まないといけないわね」

「その通りで」
「今度はおどけて言葉を返す。」
「ではこれからは」
「もう墓場から出てもいい頃よね」
「ロジーナはふと笑ってこう言うのだった。」
「そうは思わないかしら」
「それは何によつてですか？」
「顔と頭で」
くすりと笑って述べる。
「できたらいいかしら」
「では私はこれまでに以上に協力させて頂きましょう」
「御願ひするわ。おや」
「だがここで玄関の方を見て声をあげた。」
「そうして欲しいけれど今は待つて」
「どう為されました？」
「おじ様よ」
「バルトロ先生が」
「フィガロはおじ様と聞いて顔を顰めさせた。」
「もう戻つて来たのですか」
「隠れて」
「そうフィガロに告げる。」
「また後でね」
「わかりました。それじゃあ」
「あの方も来られるのよね」
「最後に伯爵について尋ねる。」
「ここにまた」
「当然です」
「フィガロは穏やかな笑顔になつてロジーナに答える。」
「今着替えを終えられてこちらに向かわれています」
「そう。だつたらいいわ」

ロジーナはそれを聞いてまた笑顔になった。

「じゃあまたね」

「はい」

二人は別れる。そうしてロジーナは家の一階に向かう。そこは大広間があり大きなスペイン調の家具が置かれている。カーテンや装飾は華美でフランスっぽさが漂っている。これはこの時のスペイン王家がブルボン家だったせいであろうか。僅かに置物等にオーストリアの空気が残っているのが目に入る。

第一幕その八

バルトロはその大広間の中の椅子に座っていた。そうして不機嫌な顔をしていたのだった。

「全く以ってけしからん」

「おじ様、どうしたの？」

「何でもない」

ロジーナに顔を向けて言う。

「何でもないしかな」

「しかし？」

「あの床屋を知らないか」

「床屋って？」

「フィガロだ」

バルトロは不機嫌さを増してそうロジーナに返した。

「フィガロは何処にいるのだ？知っているか？」

「私が？」

「そうだ。知っているか？何処にいるのか」

「昨日御会いましたけれど」

ここではあえて嘘をついた。彼の様子を見る為だ。

「それが何か？」

「昨日なのだな」

「ええ」

嘘をついたまま答える。

「どうかされたのですか？」

「ならばいいのだが」

「ふん」

（本当かどうか）

バルトロは心の中でロジーナを疑いながら彼女に応えた。

（とにかく。あの床屋は用心しないとな）

（やれやれ、疑い深いおじ様なこと）

ロジーナもロジーナでバルトロを見ながら心の中で呟く。

（けれど見ていらっしやい。きっと）

（わしの後妻にしよう。そうすれば財産も手に入るしな）

お互いそんなことを考えていた。バルトロはここで鈴を鳴らした。

「ベルタ、アンブロージョ」

「はい」

「何か」

すぐに小柄な中年の使用人が二人来た。一人は黒髪で痩せていてもう一人は赤髪で少し太めだ。どちらもスペイン女らしく浅黒めの肌をしている。

「マルチェリーナはどうした？」

バルトロはふともう一人名前を出してきた。

「見たらないが」

「マルチェリーナならもう別のところへ移ったじゃないですか」

「そうですよ」

二人は口を揃えて言う。

「契約が切れて」

「おっと、そうだったか」

バルトロはそれを言われて思い出した顔になった。

「そういえばそうだった。惜しいことをした」

「折角御子息もおられたのに」

「その方も」

「それは言っな」

バルトロは息子の話を出されると寂しげなものを見せてきた。

「きっと何処かで生きているからな」

「左様ですか」

「それならいいですか」

「それでだ」

ここで話を元に戻してきた。

「床屋だが」

「フィガロさんですか？」

「そうだ。あの男は今日ここに来たか？」

真剣な顔で二人に問う。

「どうなのだ、そこは」

「さて」

二人はその問いには首を傾げてきた。ベルタは右に、アンブロージヨは左に。丁度真ん中が空く形となりバルトロはその空いたところが妙に目に入った。

「見ませんでしたか？」

「私共は」

「そうか。ならしい」

本当に知らないと見て二人に関してはそれまでとした。

「用は済んだ。仕事に戻ってくれ」

「はい」

「それでは」

二人は自分達の仕事に戻る。それと入れ替わりに背が高く白い髪を被った藍色の下地に銀の糸で刺繍された貴族の服を着た男が来た。顔が結構細長くそれが彼の長身をさらに際立たせている。見れば目の感じがいささかひょうきんだ。

「博士、お早うございます」

「おお、来てくれたか先生」

バルトロは帽子を胸に置き恭しく一礼する彼に顔を向けて笑顔になった。

「いい時に」

「このドン＝バジリオはいつもいい時に来るのです」

その彼ドン＝バジリオはそう言って笑ってみせてきた。

「それが私です」

「全くだ。それでだ」

バルトロは彼の言葉に笑顔になり言葉を続けた。

「実は事情が変わった」

「事情といえますと」

「ロジーナとすぐに結婚したいのだ」

右手を自分の顎に当てて言う。

「すぐにですか」

「今日か明日にでも。どうだ？」

「またそれは急ですな」

バジリオはそれを聞いて目を少し見開いてみせてきた。

第一幕その九

「どうされたのですか？」

「どうもロジーナに言い寄る男がいる」

「ほう」

バジリオはそれを聞いて今度は目をしばたかせた。

「それはまた厄介な」

「それでだ。早めに手を打とうと思ってな」

「よいことです」

その言葉には笑顔で応えてきた。

「では早速」

「頼めるか？」

「博士の為でしたら」

また恭しく一礼して述べる。上品だが何処かユーモラスさのある礼だ。

「すぐにでも。ただ」

「ただ？」

「慎重に進めさせて頂きます」

こう応えるのだった。

「宜しいでしょうか」

「その辺りは任せる」

それに関しては問題としなかった。

「で。どうするのだね？」

「まずは作り話をします。相手は」

「何か最近この辺りをうろついている学生だな」

彼は伯爵の正体を知らない。その程度にしか思っていない。

「あの学生ですか」

「知っているのか」

「はい。何度か見掛けたことはあります」

バジリオも冷静な口調で述べてきた。

「あの男でしたら」

「策があるのだな」

「はい、十分に」

また笑って述べる。

「ここは作り話をしていきましょう」

「作り話だと」

バルトロはそれを聞いて今度は彼が目をしばたかせた。

「それでか」

「左様です。それで奴を世間の笑いものにして彼女に恥ずべき男、下らぬ男と思わせるのです。これで宜しいでしょうか」

「そうだな。ではそれで頼む」

バルトロはそれでよしとした。

「はい」

「これは。そうだな」

バルトロはバジリオの言葉を頭の中で反芻しながら答えた。

「中傷だな、つまりは」

「その通りです」

バジリオもしれっとした顔で笑って答える。

「それが効果があるのか」

「あるのでございます」

彼はそう主張する。続いて述べる。

「宜しいですか博士」

「うむ」

「中傷とはそよ風のようなもので。優しいそよ風のようなものです」
「それでは意味がないのではないのか？」

「だからよいのです」

笑って彼にまた言う。

「吹いているのかどうかわからないからこそ。まずは軽快に優しく吹きはじめ」

「そして？」

バジリオの口調が面白いので興味を持って問うた。

「どうなるのだ？」

「優しく囁きはじめ静かに低い声で擦り寄り」

「ふん」

「走りだして唸りだし。人々の耳の中に上手く入り込み」

「巧妙だな」

「そのまま心を支配してしまいます。そこから少しずつ大きくなりあちこちを吹き荒びます」

そのまま言葉を続ける。

「雷鳴の如く唸り聞く者の心を驚かし遂には大砲や地震、台風のように爆発して辺り一面に鳴り響きます。そうして中傷された者は人々の鞭の下で惨めに死ぬこととなります」

「恐ろしい」

バルトロはまずはそれを認めた。

「実に恐ろしい威力だ、中傷というものは」

「私もされたことがありますので」

一瞬だが苦虫を噛み潰した顔を見せた。

「よくわかっています。必要ならばこれで」

「しかしだ」

バルトロはここで微妙な顔を見せてきた。

「しかし？」

「それだと時間がかかり過ぎる」

彼はそう言ってきた。

「時間がですか」

「そうだ。それに君もそれを使いたいのか？」

「必要とあらばですが」

また一瞬だが苦虫を噛み潰した顔になる。

「そうか。わしは今はいはいたくはない」

「時間の関係で？」

「それもある。それにどうにもあまりにも陰険だ」
バルトロも悪人ではない。そこまでは考えてはいなかった。

第一幕その十

「わしのやり方でいきたい。ここはあの若造を退ける方法を考えよう」

「まあお金になるのでしたら」

「バジリオは少し本音を出した。」

「何でも」

「さあ、わしの部屋に」

「バジリオを誘う。」

「入ってコーヒーでも飲みながら話をしよう」

「わかりました。それでは」

二人はバルトロの部屋に入る。それと入れ替わりに家の扉からフィガロが入った。そうしてバルトロの部屋の扉を見ながら顔を顰めさせた。

「いい話を聞いた。おかげであちらの魂胆はわかった」
「まずはそれは安心した。」

「しかしそう来るなら。見ているよ」

「何を見ていろっていうの？」

「そこにロジーナが来た。上から降りてきたのだ。」

「フィガロさん、今度は」

「ああロジーナさんいいところに」

「フィガロはロジーナに顔を向けて笑顔を見せてきた。」

「いいところに？」

「そうですね。このままだとすね」

「ええ」

「私はウェディングケーキを食べることになります」

「つまり結婚式を見ることになるというのだ。」

「バルトロ博士の」

「という私とあの人の」

「そうです。それも今日か明日中に。無理にでも理由をつけて」
おじ様と言っても血縁関係ではない。後見人だからそれが可能な
のだ。

「今あの部屋で」

「あの部屋で」

フィガロが指差したバルトロの部屋の扉を見る。扉は不気味な沈
黙を守っている。

「今ドン・バジリオと相談中なんですよ」

「危ないわね」

「もうすぐリンドーロ君も戻ってきます」

ここで伯爵の偽名を出す。

「ですから」

「わかったわ」

ロジーナもその言葉に頷く。

「それじゃあ。もう少しね」

「はい。ですがね」

フィガロはふとした感じで困った顔を見せてきた。これも計算し
ている。

「何か？」

「リンドーロ君には困ったところが一つあります」

「どうかしたの？何処か悪いとか」

「心の病です」

「それは大変」

「恋の病でして」

そういうことであつた。言いながらロジーナを見やる。

「おわかりですね」

「ええ。よくね」

ロジーナも全てを理解して笑顔で頷く。

「ある方を想つて」

「それは誰かしら」

わかったうえで尋ねる。それが心地よいからだ。相手の気持ちを再確認することが。

「よかつたら教えてもらえるかしら」

「目の前に」

「目の前って？」

「ですから私の目の前に」

フィガロは笑って述べる。

「そこにおられます」

「それでその方の容姿は」

「とてもお奇麗です」

また笑って述べてきた。

「可愛らしくて利発そうな娘で」

「ふん。それで？」

「髪は黒く頬は薔薇色で」

「さらにいいわね」

自分のことなので当然悪い気はしない。

「さらにですね」

「ええ」

「訴えるみたいな眼差しで誰かを虜にする麗しの手」

「その人の名前は？」

これまたわかつていて問うた。

「よかつたら教えて」

「それはですね」

「ええ、それは」

さらに突っ込む。

「口……」

「口！？」

「ロジーナ様です」

「私のことなのね」

それを確かめてにこにここと笑う。

「嫌だわ。想われているなんて」

「ですが本当のことです」

ロジーナをさらに喜ばせる為の言葉だった。

「リンドーロ君は貴方にぞっこんです」

「けれどあの方は今何処に」

「ですから間も無くここに」

またそれを言う。

「ですから御安心を」

「わかったわ。けれど待ち遠しいわ」

うきうきとした顔と声での言葉だった。

第一幕その十一

「どうなるのか」

「すぐに来られますがただ」

「ただ？今度は何かしら」

「お手紙があれば尚いいです」

彼も手紙を所望であつた。恋では当然のアイテムだからだ。

「今から書かれては」

「それならもうあるわ」

「もうですか」

「偶然ね。もう書いたのよ」

「左様ですか」

（いや、これはまた）

ロジーナの演技に合わせたが内心彼女の素早さに舌を巻いていた。

（これは。本当に賢いな）

「これで宜しいのね」

ロジーナは余裕に満ちた顔でフィガロに問うた。

「どうかしら」

「はい、これでもう充分です」

フィガロも会心の笑顔で返す。

「これでね。じゃあ御願いね」

「わかりました。では」

フィガロは素早く家を後にした。懷の中に手紙を入れて。すると彼と入れ替わりの形でバルトロが部屋から出て来たのであつた。

「おじ様」

「今誰が来ていたのだ？」

「散髪屋さんが」

ロジーナはしれつとしてこつ返した。

「若しかして帰ってもらつたら駄目でしたか？」

「うむ、少しな」

ロジーナから視線を離してやや気難しい顔で答えた。

「少し聞きたいことがあった」

「何でしょうか」

「御前と何を話していたのだ？」

ロジーナに視線を向けて問う。

「一体何を」

「別に。大したことではありませんわ」

ロジーナはしれつとして述べる。

「些細なことですよ」

「どんなことだ？」

バルトロはロジーナをジロリと見据えて彼女に問うた。

「若しかしてだ」

「フランスの流行とか最近あの方が想いを寄せておられる」

「そんな娘がいたのか、あの男にも」

「スザンナさんですけれど」

ロジーナはスザンナという名前を出してきた。

「アルマヴィーヴァ伯爵家に務めておられる」

「ああ、あの小柄な娘か」

彼女のことはバルトロも知っている。

「ふん。フィガロは大柄だし小柄な彼女はお似合いかもな」

「そういうことだけですけれど」

「ならいいが。だが」

ここでロジーナの目を見る。

「その手はどうしたのだ？」

「手がですか？」

「インクで汚れているではないか」

見ればその通りだった。手紙を書いたせいなのは言つまでもない。

「どうしたのだ？」

「火傷をしまして」

平気な顔をして誤魔化す。

「インクを薬代わりに」

「また乱暴な治療だな」

医者である彼が顔を顰めさせずにはいられないことだった。

「ではあれか」

今度はテーブルの上の紙を見た。一枚減っている。

「六枚あった紙が五枚に減ったのは」

「傷を拭きまして」

「それでペンも汚れているのか」

次にはインクで汚れているペンを見やる。

「どうということなのか」

「ペンは実はですね」

「うむ、実は」

ロジーナを問い詰める。実は彼は薄々わかっている。ロジーナはそれを誤魔化する。

「スザンナさんに刺繍をお送りしたのですがそれで」

「それで？」

「そこで花の下地を書くのに使いました。実は怪我もそうなのです」

「あまりにも下手だな」

そこまで聞いてこう返してきた。

「下手！？何がですね？」

「ええい、わしを騙せると思ったか」

激昂した声でそう言ってきた。

「いいかロジーナよ」

「ええ」

「わしは医者だ、博士だ」

そこを強調する。

「言い訳は通用せぬ。だから御前に忠告しよう」

「私にですか」

「そうだ。刺繍だの怪我だの言い訳は通用せぬ。火傷でも何で

もな。何故紙が足りないのかのかわしは知りたいのだ。誤魔化する
ならもつと上手くやることだ」

「何のことやら」

それでもロジーナはしれつとして言い返す。

「わかりませんが」

「では言おう。今後御前が出掛ける時にはバジリオをつけよう」

「ドン〃バジリオを」

「そうだ。戸口には風も入らない。御前は完全に籠の中の鳥になる
のだ」

「あらあら」

「わしは騙せぬ。それはよく覚えておきなさい」

そう宣言するのだった。そこまで言うと一旦言葉を止めた。それ
からまた言う。

第一幕その十二

「わかったな」

「ええ、まあ」

「わしを困らせぬことだ。それでは」

「どちらへ？」

「また部屋に戻る」

そうロジーナに告げた。

「それだけだ」

「左様ですか」

「しかしだ」

ここで顔を少し厳しくさせてきた。しかしどうにもユーモラスで
迫力不足なのは彼がそうした怖さとは無縁の人物だからであろう。

「ではな。反省するがいい」

「はいはい」

ロジーナはそんな彼を軽くあしらひ自分の部屋に戻る。するとい
きなり扉を叩く音がした。丁度ロジーナと入れ替わりにベルタとア
ンブロージオがやって来た。

「誰ですか？」

「何の御用件ですか？」

「どなたかおられますか？」

若い男の声だった。

「どなたか。宜しければ開けて下さい」

「そういう貴方はどなたですか？」

今度は逆に二人の召使がその若い男に問うた。

「それがわからないと」

「お入れするわけにはいきませんよ」

「私は兵士です」

男は二人の言葉にそう返した。

「今日こちらに来た」

「兵隊さんですか」

「そうです」

男はまた答えた。

「怪しい者ではありません。これで宜しいでしょうか」

「あらあら、兵隊さんでしたら」

「若しかして患者さんか何かで」

バルトロが医者なのでそう判断した。そうして扉を開けるとそこには兵士に変装した伯爵がいた。だが二人は伯爵の顔を知らなかった。そのうえ上手く化けていた。

「実はですね」

伯爵は家に入ってから二人にまた言う。

「バロルド博士に用事がありました」

「バロルド博士!？」

名前を間違えられたのを聞いてすぐにバルトロが部屋から出て来た。自分のことになると思えば異様なまでに耳が鋭いようである。

「わしの名ではないぞ、それは」

「ではベルトルドでしょうか」

「それも違う。わしはバルトロだ」

バルトロは顔をとんでもなく不機嫌にさせて言った。

「そんな変な名前ではない」

「わかりました。違うのですね」

「左様」

勿体ぶって伯爵が化けている兵士に述べる。

「わしはバルトロ博士だ」

「バルバロ博士ですか」

「そうでもない」

また顔が不機嫌そのものになる。

「わしはバルトロか」

「バルトロですね。おっと」

ようやく名前を正しく言ったところでよたつてみせる。
「いけないいけない。どうもワインが効いているようだ」
「お酒は慎まれよ」
バルトロは医者顔になって伯爵に言うのだった。
「さもないと戦場で大変なことになるうぞ」
「そうですね。それでですね」
「まだ何か」
「これを御覧になって下さい」
懐から一枚の紙を取り出してきた。
「これを」
「それは？」
「私の宿泊証です」
そう述べる。
「宿泊証か」
「そうです。おわかりになられたでしょうか」
「待て、わしの家にか」
ふとそれに気付く。
「若しかして」
「左様ですが？」
「左様ですかではないっ」
その返答に顔を顰めさせて言葉を返す。
「いきなり言われてもだな」
「まあまあ」
「あんたに宿められる筋合いはないわ」
そんな話をしているとロジーナがまた戻って来た。
「誰かいるの？」
「おおっ」
伯爵はロジーナの顔を見て顔を晴れやかにさせる。

第一幕その十三

「ようやく現われたな、僕の天使よ」

「あら、兵隊さん」

まずは伯爵の変装に気付かなかった。

「どうしてこの家に」

（あのですね）

伯爵は小声で囁きながらロジーナに近付いてきた。

「はい」

「私ですよ」

また小声で言ってきた。

「おわかりになれませんか？」

「つて若しかして」

「はい、私です」

にこやかに笑って言うのだった。

「リンドーロです」

「えっ、じゃあ」

「そうです。参上しました」

相変わらずにこやかに笑っている。

「貴女の御前に」

「ロジーナ」

バルトロは伯爵が化けた兵士がロジーナに馴れ馴れしく話し掛け
ていると判断して口を尖らせた顔を向けさせたのであった。

「一体何を騒いでいるのだ」

「私は別に」

「いや、騒いでいる」

彼は強引にそう決める。

「早くここから立ち去るのだ」

「では私も」

伯爵もそれを受けて退散しようとする。ロジーナの側へだ。バルトロはそれを見てまた言うのだった。

「何処へ行くつもりだ」

「兵営に」

「それは何処にある？」

「ここです」

しれつとして述べる。

「先程申し上げた通りに」

「馬鹿を言ってくれる」

バルトロはそれを聞いてまた口を尖らせた。

「だから君はここにはだな」

「ですからこれを」

また宿泊証を見せる。

「御覧になれば」

「そんなものは関係ないのだ」

バルトロは面と向かって反論してきた。

「そんなものはな」

「それはまたどうして」

「わしにはそれをはねつける力がある」

ユーモラスなまでに胸を張って言うのだった。

「宿泊免除の証がな」

「そんなものがあつたのですか」

「それがあるのだ」

そのまま胸を張つての言葉であつた。

「わしの机の中だな」

「ほう、それは面白い」

伯爵はそれを聞いても余裕綽々といった態度であつた。腕を組んで笑っている。

「では見せてもらいましょうか」

「いいのだな？」

「勿論」

その態度のまま言葉を返す。

「さあ、どうぞどうぞ」

「わかった。では後悔するなよ」

きつと伯爵が化けた兵士を見据えての言葉であつた。

「絶対にな」

「やれやれ。ロジーナ」

伯爵は自分の部屋に帰って行くバルトロを横目にロジーナに囁いてきた。

「はい」

「まあ安心してくれ」

「どうしてですか？」

「そんなものはどうにでもなるんだ」

また笑つて言う。

「どうとでもね」

「そうなのですか」

「そうさ。まあ見ていてくれ」

そう言葉を返す。

「これから僕がどうするのかをね」

「ええ」

「よし、これだ」

バルトロがここで自分の部屋から全速力で戻つて来た。あまりにも家の中で速く走つたのであちこちから埃が沸き起こっている。

第一幕その十四

「見つけたぞ、よく見ろ」

「何だ、こんなもの」

伯爵はその免除証をすぐに取り上げた。

「こうしてやればいいんだ」

「むっ、何をするっ」

何と破り捨ててしまったのだ。これで奇麗さっぱり終わってしまった。

「この通り。では僕はここに」

「おい、まだ言うのか」

バルトロもいい加減本気で頭にきていた。元々結構そうであったが。

「では容赦しないで」

「ほう、面白い」

伯爵は彼が怒ったのを見て柄に手をかけてみせた。

「僕は兵隊なんだがね。それでもいいかな」

「五月蠅いつ、貴族として勝負を挑むのだ」

「何も持たないのに？」

「それでもだ」

バルトロは怒ったままであった。

「味方もいないのに」

「それは貴殿も同じこと」

バルトロは伯爵を見据えて言い返した。

「違うかな、それは」

「それが違うんだよ」

伯爵は余裕の笑みでバルトロに言った。

「僕の味方はね」

「味方！？そんなものは何処に」

「ほら」

ここでロジーナに顔を向けるのだった。

「そこに」

「まあ」

「またしても戯言をつ」

バルトロはさらに怒り狂うのだった。

「許さん、許さんぞっ」

「だから。そんなことを言ってもね」

ここで何かを投げた。

「むっ！？」

「これは！？」

それはバルトロに投げたと見せ掛けてロジーナに投げていた。何と手紙であつた。

「あらっ、これは」

「さて、これは失敬」

伯爵はおどけて誤魔化す。

「失敗しました」

「いえいえ」

「一体何を投げたのだ？」

「何にも」

バルトロにはふざけた返答だった。ロジーナはその間に手紙を服の中に隠してすばやく洗濯屋のリストに交換するのだった。その間の動きが実に素早かつた。

「ありませんが。では続きを」

「待てと言つてゐるだろうが」

バルトロは激昂したままであつた。

「さもないとだな」

「さもないと？」

「承知しないぞ」

今度はロジーナにも顔を向けた。

「いい加減に何を出したのかをな」

「あら、仰いますこと」

伯爵と完全に共犯関係のロジーナはしれつとして言葉を返す。

「おじ様、もつと落ち着かれて」

「わしは落ち着いているっ」

これは本人だけがそう思っていることであつた。バルトロにとつて残念ながら。

「だからじゃ。さっきの手紙をだな」

「これですか？」

出してきたのはさっきの洗濯屋のリストであつた。バルトロはそれを見て目を剥く。

「何っ!？」

「これが何か」

「あつ、いや」

これには完全に戸惑つてしまった。

「何でもない」

「おやおや、どうされたのですか？」

その横から伯爵が彼を囁し立てる。

「そんなものが必要なのですか？」

「いや、何でもない」

そう言うしかなかった。

「こんなものには」

「あれっ!？」

ここで家の中にバジリオがやって来た。すぐに家の中の只ならぬ様子に気付く。

「どうされたのですかな」

「いつもこうなのよ」

ロジーナはわざと泣いてみせた。勿論嘘泣きである。

「私に圧政を敷いて。この圧政者」

「人聞きの悪いことを言うなっ」

「圧政者と言われてはインテリゲンチヤであるバルトロとしては黙
つてはいられなかった。」

「わしの何処が圧政者なのだ」

「だってそうじゃない」

「ムキになって言い返すロジーナであつた。」

「本当に。圧政者で」

「まだ言うのか」

「圧政者は許せないな」

伯爵も参戦してきた。にこにこ笑いながら。

第一幕その十五

「成敗しなければ」

「まだ言うのか」

「そもそも暴力はだね」

バジリオは言うまでもなくバルトロの側に参戦してきた。彼の横から言う。

「よくはないのだが」

「これは大義だ」

伯爵は手前勝手な理屈を出してきた。戦争の理屈である。

「それならば」

「だから待てっ」

「待ちなさいっ」

二人は剣を抜こうとする彼を止めた。

「弁護士を呼ぶぞ」

「弁護士！？」

「そう、弁護士だ」

バジリオが言う。強張った顔で。

「そうすれば君はだな。いや、この場合は警察か」

「待ってくれ先生」

バジリオにバルトロが突っ込みを入れてきた。

「この場合は軍の将校の方がいいぞ」

「将校ですか」

「そうだとも。兵隊なのだからな」

「確かにそうですね」

バジリオもバルトロのその提案に頷く。

「兵隊ならば。そちらの方が」

「しかも憲兵のだ」

バルトロはわかっていた。

「それでいいではないか」

「わかりました。それでは」

バジリオはそれを受けてすぐに軍の駐屯地へ向かおうとする。そこにフィガロも来た。

「また何の騒ぎで？」

「何だ、君か」

バジリオは扉を開けると出て来た彼を見て顔を不機嫌にさせた。

「君には用はないんだがね」

「私にはあるんですよ」

フィガロはその言葉に笑って返した。

「実はですね。ロジーナさんに」

「あら、また私」

ロジーナが朗らかな声を立てるとバルトロが不機嫌な顔で彼女を睨む。

「何かしら」

「はい。それは」

実はリンドーロのことである。彼がいるのを横目で見ながら暗号的に示唆する感じで言おうとするがそこでまたしても異変が起こるのだった。

「何の騒ぎだ？喧嘩か？」

「！？今度は何だ！？」

バルトロは扉の方の声にすぐに顔を向けた。

「今から入りますが宜しいでしょうか」

「どなたですか？」

バルトロが扉の前に来てその声に問うた。

「宜しければ名乗って下さい」

「連隊の者ですが」

「ほう、連隊の」

「アルビー二大尉と申します」

「おお、これはいい」

実際に将校が来たので顔を綻ばせる。まさに渡りに舟だ。

「士官殿が来られるとは」

「何の騒ぎでしょうか」

大尉は扉の向こうからバルトロに問うた。

「実はですね」

「はい」

「そちらの兵隊さんがいきなり上がり込んできて騒いでいるのですよ」

「何とっ」

将校としては聞き捨てならない話であった。すぐに声色が変わる。

「それは大変だ」

「何とかして下さい」

バルトロはここぞとばかりに言う。

「本当に困っていますから」

「わかりましたっ」

将校も真剣な声で答える。

「それではすぐにでも」

「はい、どうぞ」

扉を開ける。するとすぐに軍服を着た士官が多くの兵士達を連れて家の中に入って来た。

第一幕その十六

バルトロとバジリオは彼等を見てほっと一息という顔であった。ロジーナも流石に強張った顔をしている。ところが伯爵が化けている兵士だけは平気な顔であった。

「では事情をお聞かせ下さい」

「あの兵隊がですな」

バルトロはすぐに士官に事情を話す。

「いきなりここにやって来て泊めると言い出すわ後見している娘に色目は使うわで」

「その通りです」

バジリオも言う。

「それで困っているのです」

「彼に悪気はありません」

ロジーナは伯爵を庇う。

「ですから許して下さい」

「まあ落ち着かれてね」

フィガロが一番落ち着いていた。伯爵を除いて。

「そうすればおわかりになられるかと」

「何かよくわかりませんが」

士官は首を捻って彼等の話を聞いていた。本当にわからなくなっていた。

「何が何なのか」

「つまりですね」

「このならず者が」

バルトロとバジリオはまた言う。

「全て悪いのです」

「だからこそ」

「まあお待ち下さい」

明らかに冷静さをなくしている彼等からまずは距離を置いた。それで伯爵が化けている兵士に顔を向けるのであった。それから言う。「とにかく君には来てもらいたい」

「どちらに？」

「憲兵隊の詰所に。事情聴取だ」

「おっと、それは必要がないよ」

「！？」

「ほら」

ここで懐からある書類を出して士官に見せた。すると士官は驚いた顔で姿勢を正して敬礼をし、兵士達もそれに続いて慌しく捧げ銃をした。それはバルト口達にも見られた。

「何だ一体」

「何が起こったのだ」

皆今の出来事に呆然となる。

「これは一体」

「奇跡か、それとも」

「わかりました」

士官は緊張した面持ちで伯爵に応える。はたから見れば士官が兵士に敬礼をしているのだ。これ程おかしな光景はないと言ってよかった。

「そういうことでしたら」

「わからん、何事だ」

バルトロとバジリオはそんな様子を見てまだ言う。

「わしは夢を見ているのか」

「どういうことかしら」

ロジナはロジナで何が起こったのかわからなかった。

「将校さんの態度が急に変わるなんて」

「さて、騒ぎはまずは収まった」

フィガロはにこにこ笑って様子を見ている。

「このまま流れに乗れるかな」

「流れはこちらのものだ」

伯爵は今の状況に満足していた。

「よし、それじゃあ」

「何かが起こる」

銘々それははっきりわかっていた。

「このままいけば」

「上手くいくな」

「どうなるんだ」

だが結果への予想はそれぞれであった。何はともあれ騒ぎはまだ続くのであった。

第二幕その一

第二幕 大騒ぎの結末は

とりあえず騒ぎは終わった。兵隊達もバルトロが思うところの胡散臭い兵隊も去った。ロジーナは二階に戻りバジリオとフィガロはシェスタに向かった。バルトロは一人家に残りあれこれ考えに耽っていた。

「あまりにもおかしい」

部屋の中をうろつろとしながら呟く。

「あの兵隊は何者なのだ」

考えるのはやはり彼のことであつた。

「将校が敬礼をするとは」

そのことがまずおかしかった。将校と兵士の差は言うまでもなく圧倒的なのだ。それでどうして敬礼なぞするのか。そのことをまず思つた。

「しかもだ」

ここでもう一つの謎が出て来た。

「何故だ？ロジーナを知っているようだ」

そこにも気付いた。

「何故だ？はじめて会つたというのに。何故知っている」

謎は思えば理に合わないものばかりだ。その謎について考えれば考える程わからなくなってくる。ここでその謎をさらに引つ掻き回す人物がやって来た。

「バルトロ博士、バルトロ博士」

「はい」

扉をノックする音と声に挨拶をする。

「どなたでしょうか」

「音楽教師ですが」

「音楽教師！？」

その言葉を聞いて目をしばたかせる。

「ドン」バジリオは？」

「いえ、急病で来られなくて」

都合のいい嘘が出て来た。だがそれについてはバルトロは何も知らない。知っている筈もないことであつた。

「それで私が代理出来ました。宜しいでしょうか」

「ええ、構いません」

バルトロは何もわからないままそれに応えた。そうして扉を開ける。するとそこからバジリオと殆ど同じ服を着た伯爵が入って来た。だがバルトロは服装と変装のせいで彼が先程散々騒ぎまくり彼に謎を置いていった兵士だとは一見では思いも寄らない。

「はじめまして」

その音楽教師は恭しく上品に一礼した。

「お元氣なようで」

「有り難うございます」

バルトロも上品に返礼する。それから彼の顔を見た。今顔をじつくりと見てあることに気付いたのであつた。

「おや？」

「何か？」

「いえ、何も」

ふと気付いたがそれはまずは言葉には出さなかつた。しかしその間も彼の顔を見続けている。

（おかしい、この顔は何処かで見たか？）

記憶に引つ掛かるものを感じたのである。

（だとすれば誰だろう。何処の誰か）

（気付いてもわかりはしないだろうな）

伯爵は伯爵で心の中で呟いていた。

（私のことはな。気付いても別の変装で）

「ご機嫌よう」

「いやいや」

また挨拶をするがバルトロはいぶかしむものだった。だがそれを出すのは顔だけであり決して声には出さないのであった。顔に出ているが。

「それでですね」

「はい。何か」

「お元気でしょうか」

「ええ、まあ」

（同じことばかり言うな。おかしい音楽教師だ）

また心の中で呟く。

（そもそも。何者なのか）

「それですね」

「はい」

また伯爵が化けている音楽教師に応える。しつこいので少しうんざりしてきている。

「御身体の方は」

「だから元気です」

また同じような質問なのでさらにうんざりしてきた。

「ですから。それよりもですな」

「何でしょうか」

今度はバルトロが問うた。

「貴方の御名前は。何というのでしょうか」

「私の名前ですか」

「ええ、代理といえど」

伯爵が化けている音楽教師を胡散臭いものを見る目で眺めながら言うのだった。

「知っておきたいので。どなたでしょうか」

「はい、私の名前は」

「貴方の御名前は」

「ドン＝アロンソです」

適当に名乗った。

第二幕その二

「それが私の名です。バジリオ先生の弟子です」

「ドン・バジリオに!？」

バルトロはその話を聞いて首を傾げさせた。それと共に記憶を辿る。

「彼に弟子がいたかな」

「それがいたのですよ」

伯爵はしれつとしてそう述べる。

「私という素晴らしい弟子が」

「わかりました。しかしですな」

バルトロはまた疑問を呈してきた。

「彼は今何処に」

「シエスタです」

これは事実である。ラテンの習慣であり誰もが守っている。今守っていないのはあれこれ考えているバルトロとこれまたあれこれ動き回っている伯爵だけだったりする。

「ですから」

「しかしそれ位で代理を立てるのは」

「実はですね」

芝居で深刻な顔を作つて言つのだった。

「御病気でもありませんか」

「病気!？急にか」

「どうも風邪のようです」

これまた嘘である。何処までも適当な嘘をつく。

「それで」

「それはいかな」

バルトロはそれを聞いてすぐに医者顔になった。生真面目な表情で述べる。

「すぐに様子を見に行こう」

「いや、それには及びません」

今のバルトロの言葉は予想していなかったので内心結構焦っていた。だがそれはどうにかこうにか隠すことには成功した。少なくとも顔には出さなかった。

「それ程悪くはないので」

「そうか」

（胡散臭いな）

バルトロもいい加減伯爵が化けているこの音楽教師を本気でそう認識しだした。

（どうにもこうにも）

「だが行こう」

「ですからそれには及びません」

「わしは医者だぞ」

遂に権威を出してきた。医者という言葉は実に強い。

「そのわしが言ってるのだ。だからこそ」

「ですからそれには及びないと。そもそも」

「そもそも。何だ？」

迂闊にも今の伯爵の言葉に気を取られた。すると伯爵はこころざとばかりに静かな攻勢に出るのだった。

「私は別の用事でもこちらに参りました。そのことについてもお話させて下さい」

「それは一体何だ？」

（またしても出まかせか）

バルトロはまたしても心の中でそう思った。

（この若い狐が。もう誤魔化されんぞ）

「それではすな」

じろりと彼を見据えながら問うた。

「その御用件をお話下さい」

「はい」

伯爵が化けている音楽教師はそれに応えて述べる。聞こえないような極めて小さい、蚊の鳴くような声で。

「・・・・・・・・というわけです」

「何とっ!？」

全然聞こえなかったので思わず問うた。

「今何と言われた」

「ですから・・・・・・・・と」

またしても小声で言う。

「おわかりでしょうか」

「全然わからん」

完全にバジリオのことを忘れて彼に言い返す。

「何が何なのか」

「ですからロジーナさんのことです」

彼が乗ってきたところで本題を出した。全ては予定通りである。

バルトロもロジーナの名が出るといつい身を乗り出してしまった。

「ロジーナだと」

「そうです、ロジーナさんです」

彼はまた答える。

「あの方のことですが」

「何かあったのか!？」

「いえ、些細なことです」

バルトロが乗ってきたのを見ながら笑みを隠して言う。

「実に些細なことなので言おうか言まいか考えていたのですが」

「是非言ってくれ」

バルトロは本当に身を乗り出して言った。

「ロジーナのことを。さあ」

「それでは。宜しいですね」

「無論」

また答える。

「早く、今すぐに」

「わかりました。実はですね」

「うむ」

身を乗り出したまま伯爵が化けているその音楽教師の話を聞くのだった。完全に彼の術中に陥っているとも知らずに。完全に伯爵の勝ちであつた。

第二幕その三

「リンドーロ……でしたっけ」

「あいつがか」

バルトロの表情が一変した。怒ったものになる。

「彼にあてたロジーナさんの手紙を持って来ました」

「そんな話は早く言ってくれっ」

バルトロは激昂して彼に言った。

「何故今まで言わなかったのだ」

「ですから些細なことですので」

「全然些細ではないわっ」

「少なくとも彼には。」

「あるのか、今それは」

「私の懷の中に」

これは事実だ。何しろこれが今の彼の策略のメインだからだ。

「ありますが。では」

「すぐに見せてくれ」

そう伯爵が化けている音楽教師に言う。

「すぐにな。いいな」

「わかりました。それでは」

それを受けて懷から手紙を差し出した。バルトロはそれを見るとすぐにひったくるようにして受け取りその中を貪るようにして読みはじめた。まずは筆跡であるが。

「間違いない」

その筆跡を見て言う。

「ロジーナの字だな」

「それですね」

「それで。今度は？」

「アルマヴィーヴァ伯爵を御存知でしょうか」

自分の名前をさりげなく出してきた。

「ああ、彼なら知っている」

バルトロもその言葉に頷く。手紙を読みながら。

「その彼がどうしたのだ？」

「実は彼がロジーナさんを狙っています」

「何っ!？」

「それで何かとうろろしているようなのですよ」

「それはまことか」

「私は嘘は申しません」

（嘘だがね）

（嘘だな）

それは二人共嘘だとわかっていたがあえて口には出さない。

「ですから信じて下さい」

「わかった。ではすぐにロジーナを呼ぼう」

「ロジーナさんをですか」

「本人に知らせるべきだ、こうした話は」

彼は真顔で述べる。

「だからこそだ。いいな」

「そうですね。いいかと」

心の中では思うところがあつたがそれは今は隠した。

「それではどうぞ」

「うむ。流石はドン・バジリオの弟子」

これは完全にお世辞である。伯爵もそれはわかっている。

「感謝する。ではな」

「はい、有り難うございます」

バルトロはすぐに二階の階段を登りロジーナのところに向かった。

伯爵はそれを見ながら一人呟くのであった。

「まあ仕方ないな、今は」

ロジーナの手紙をバルトロに渡したことを言う。実は事前に結構迷っていたのだ。彼にとってはかなり思い切った策略だったのだ。

「後は彼女に僕の計画を話して、と。それで行こう」

「ささ、ロジーナ」

すぐにバルトロはロジーナの手を引いて戻って来た。どうやらシエスタをしていた彼女は今一つ浮かない顔をしていた。

「早く来なさい。今日の音楽の先生だよ」

「今日の！？」

何か変な言葉に階段を降りながら首を傾げさせる。

「バジリオ先生ではないの？」

「どうも風邪らしい」

伯爵が化けた音楽教師の言葉をそのまま述べる。

「それで今日はだな」

「ええ」

「ドン＝アロンソ先生が来られている」

「ドン＝アロンソ！？」

ロジーナも聞きなれない名に目をしばたかせる。

「どなたなの、それは」

「何だ、知らないのか」

自分も知らないのは内緒である。

「ドン＝バジリオの弟子でな」

「バジリオ先生の」

ロジーナはそれを聞いて今度は首を傾げさせた。さらに聞かないことだったからだ。

「弟子なのですか？」

「うむ、若いが素晴らしい方だ」

そう述べる。

「わかったら早く。さあ」

「わかりましたわ。では」

階段を完全に下りて一階に来た。すると彼がいた。

「まあ」

「どうも」

伯爵はあえて恭しく一礼する。

「ドン＝アロンソです」

「はじめまして」

ロジーナもスカートの裾を掴んで恭しく一礼する。上品に見えるがそこには上品よりもおどけたものがあつた。だがそれはバルトロにはわからない。

第二幕その四

「ロジーナですわ」

「はい。それではですね」

ここで彼はにこやかに言う。部屋の隅にハープシコードを見つけるとそれを出してきた。

「早速レッスンはじめますが曲はどれが得意ですか？」

「無駄な用心のロンドを」

ロジーナはにこやかに笑って答える。

「それを御願いしますわ」

「ではおじ様」

ロジーナはここですっかり手持ちぶたさになっていたバルトロに声をかけた。

「今からはじめますので」

「うむ、わかった」

紳士でありたいと考えるバルトロはその言葉に素直に従った。そうして彼が立ち去ると伯爵は本当の顔を見せてロジーナに近付くのだった。

「では。いいかな」

「ええ」

殆ど恋人同士の顔になっている。その顔で言葉を交えている。

「ロンドを」

「無用心のロンドだったわね」

「いや、ここは変えよう」

だが伯爵はこう提案してきた。

「貴女に相応しい歌に」

「私に！？それは一体」

「そうだね。情熱的なものがいいね」

伯爵はにこりと笑って述べた。

「激しい愛の炎が燃える心にはってというのはどうかな」

「ああ、あのARIAね」

そのARIAはロジーナも知っていた。それもよく。

「じゃああのARIAを」

「うん。それじゃあ」

伯爵は上手にハーブを弾きはじめる。そうしてロジーナはそれに乗って歌いはじめたのであった。

「激しい愛の炎が燃える心に対してはどんな横暴な力も残酷な力も無力です。如何なる攻撃に対しても愛は常に勝つもの」

演奏は続く。それに合わせてロジーナの歌も続く。

「ああ私の愛しい方」

ここで伯爵を見る。伯爵もその視線を受けて微笑む。

「若し貴方がそれを御存知なら私をお救い下さい」

「うつむ、素晴らしい」

歌が終わった。伯爵はハーブを止めてロジーナを褒め称える。

「これは私が教える必要はないかも」

「あらあら」

ロジーナはその褒め言葉におどけてみせる。

「そんなお世辞を仰つても何もありませんわよ」

「いや、これがあるのですよ」

しかし伯爵はこう述べる。

「貴女の笑顔が見られます」

「あら、お世辞を」

「では最後をもう一度だけ」

その笑顔を見る為のもう一度だった。ロジーナもそれに乗る。

「では」

「ええ。愛しい方、どうか私をお救いになられうつとりとさせて下さい」

「うつむ、お見事」

伯爵はまた彼を褒め称える。

「やはり。そうでなければ」

「はい。歌はこうでなくては」

「いやいや」

しかしそれに異議を呈するものが出て来た。バルトロが今自分の部屋から出て来たのである。そうして二人に対して言うのであった。

「その曲は少し」

「御気に召されませんか？」

「いいことはいいですな」

そう伯爵が化けている音楽教師に述べる。

「だが。わしの若い時の曲とは全然違つて」

「はあ」

「モーツァルトの流れですか」

彼は言う。

「それから出て来たような曲ですな」

「モーツァルトは天才ですよ」

伯爵は穏やかな笑みと共にそう述べる。

「オペラではまさに端役なしですしどの曲も」

「まるで天使の歌声のようだ」

バルトロも言う。

「そう仰りたいのですな」

「その通りです。あれだけの天才は今まで出ませんでしたし今後も」
「しかしですな」

バルトロはここぞとばかりにまたしても異議を呈した。

第二幕その五

「アリアにしろグルックの方が」

「宜しいのですか」

「モンテヴェルディは御存知でしょうか」

「名前だけは」

実は伯爵はその名を詳しくは知らない。目が少し泳いでしまった。
「ベルコレージ。若くして亡くなってしまつて」

「はあ」

「彼等の素晴らしい曲が好きなのです。所謂ルネサンスにバロックが」

「先生のお好みですか」

「とりわけカストラートです」

バルトロの言葉がうつとりとしてきた。

「ファルネツリは素晴らしかったそうです」

伝説的カストラートである。歌唱力だけでなく容姿も素晴らしかったと言われている。スペイン国王の相談役でもあったのだ。

「近頃の啓蒙主義者はカストラートを好ましく思っていないようで」

「モーツァルトもカストラートの曲を作曲していますが？」

「いや、それでも」

違ふのだとバルトロは言う。

「あの御仁はソプラノやテノールにどちらかといえば力が」

「まあそうですね」

それは伯爵も認める。実際にモーツァルトはソプラノの為に超絶的なコロトゥーラテクニクを使ったソプラノを残している。そちらの方が遙かに有名であるのだ。

「台本も。モーツァルトのものはどうも軽やかで」

「重厚に？」

「そう、ヘンデルのジュリアスシーザーのように」

そのカストラートが表題役、つまりタイトルロールを歌う役だ。英雄はカストラートこそが歌う時代だったのだ。バルトロはその時代を懐かしんでいるのである。

「歌うのです。こうして」

一部を歌いはじめる。そこにフィガロも扉からやって来て真似をする。見ればその仕草がそっくりである。本当の親子の様に。

「おやフィガロ君」

あまりにもフィガロの動きがいいのでバルトロは機嫌をよくしてフィガロに声をかけた。

「いいねえ、筋がいい」

「いえいえ」

フィガロはその言葉に笑って応える。

「それはまあ」

「ところで君はどうしてここに」

「だって今日じゃないですか」

笑ったままバルトロに述べる。

「今日ですよ」

「はて、今日」

バルトロはその言葉に首を傾げさせる。

「何かあつたかのう？」

「お髭を剃る日じゃないですか」

「おお、そうだったか」

言われてやっと思い出す。しかしバルトロはここで左手で拒むのだった。

「悪いが今日はいい」

「またそれはどうして」

「気分ではないので」

「ではかなり先になりますか」

フィガロはそう前置きしてきた。

「それでも宜しいですか？」

「そんなに先になるのか」

「何しろ忙しいので」

これは本当のことであつた。実際に紙を出してバルトロに説明する。

「今日この街に来られた土官の方々の髭剃りや侯爵夫人の鬢に伯爵の若様の散髪、弁護士さんには下剤をお渡ししてと。明日だけこれだけです」

「随分繁盛しているな」

「おかげさまで」

この言葉にはにんまりと笑つて言葉を返す。

「ですから今日を逃されると」

「では仕方がないか」

「サービスしておきますよ」

「そうだな。では頼もう」

少し考えてからそう答えた。

「それで。タオルを出してきてくれ」

「はい」

バルトロはここで懷から鍵束を取り出したがすぐに引つ込めてしまった。フィガロはそれを見てバルトロに尋ねるのであつた。

「何か？」

「わしが取つて来る」

何かに気付いてそう述べた。

「左様ですか」

「うむ。そういうことだ」

（ふうむ）

フィガロは今まで鍵束を持っていたバルトロの手を見ながら考えた。そうして心の中で呟くのであつた。

（あの鍵束が手に入れば大きいな）

そう呟きそつとロジーナに囁く。

「あのですね」

「はい」

「あの鍵束の中に鎧戸のがありますか？」

「ええ」

ロジーナはフィガロのその問いに囁きで答えた。

「確か一番新しいのです」

「そうですか」

フィガロはまたバルトロの手を見て応えた。

「それなら」

「待てよ」

バルトロはここでまた気が変わった。そのうえでフィガロに声をかける。

「フィガロ君」

「何でしょうか」

「やはり君に頼めるかな」

「宜しいのですか？」

「うむ。何かな」

伯爵が化けている音楽教師とロジーナを見ての言葉である。二人の間に微妙な空気を読み取ったからこそその言葉であった。

第二幕その六

「気になることができてな」

「そうですね。それでは」

「頼むぞ。それではな」

「有り難うございます」

フィガロは鍵束を受け取るとそのまま部屋から消えた。そうしてバルトロは今度は伯爵が化けている音楽教師のところにそっと寄って囁くのだった。フィガロを見ながら。

「あの散髪屋をどう思われますか？」

「といいますと」

「いえね、怪しいですよね」

横目でフィガロを見ながら言う。

「若しかしてあいつが伯爵とロジーナの手引きを」

「可能性はありますな」

伯爵はここぞとばかりにバルトロを不安にさせる為にこう囁いた。

「どうにも」

「そうですね、やはり」

「御気をつけを」

ここぞとばかりにまた言う。

「詐欺師かも知れませんか」

「わかりました。ではそのように」

こう言ったところで家の奥からとんでもない物音がした。バルトロはその物音を聞いて思わず叫ぶのだった。

「今度は一体何だ！？」

その声と共に家の奥に向かう。伯爵とロジーナはまた二人きりになったのであった。

「フィガロがまたやってくれたようです」

「はい」

二人は見詰め合つて頷き合う。それはまさに恋人同士の姿であつた。

「こうして私達はまた」

「一緒に」

「全く以つて」

ところが。そのバルトロが戻つて来た。フィガロを連れて。

「今度はこんなことをしてくれるとは。困ったことだ」

「いやあ、すいません」

フィガロは涼しい顔絵で彼に応える。

「失敗しました」

「失敗したではないだろう」

バルトロは半分泣いた声でフィガロに言う。

「お皿を六枚にコップが八つ、土鍋を一つ」

「日本だとそのまま井戸の下ですな」

「何だそれは」

変なことを聞いて眉を顰めさせる。

「日本にそんな話があるのか？」

「そうらしいです」

笑つてそう返す。

「幽霊の話で」

「怪談はいい。これは弁償ものだぞ」

「すいません。では今日の髭剃りは無料で」

「そうしてもらわないと困る」

それでも安いと思つたがここは度量を見せることにしたバルトロだつた。

「是非な。それで許すから」

「有り難き幸せ」

そう言いながら伯爵にバルコニーの錠戸の鍵をそつと手渡す。それからこつそりと言うのだった。

「これです」

「これがあの窓の鍵か」

「そうです。何とか手に入れました」

「うん、有り難う」

「しかし。大変でしたよ」

少し苦笑いを浮かべてみせた。

「大変！？じゃあさっきのは」

「いや、あれは芝居です」

それはそうだったのだ。

「バルトロ先生をそっちに向かわせる為の」

「成程、そうだったのか」

「それですね」

フィガロはまた言う。

「これでとっておきのカードを手に入れましたし」

「後は動くだけか」

「はい。宜しいですか？」

「うん、それじゃあ」

頷き合う。二人は今会心の笑みを浮かべていたがそれは一瞬のことだった。何とここでとんでもない人物が家の中にやって来たからだ。

「どうも、遅れまして」

バジリオだ。帽子を取って深々と一礼して家の中に入る。皆そんな彼の姿を見て思わず声をあげそうになった。驚いているどころか凍り付いている者すらいる。

「何でここに」

「しまった」

「困ったことになったぞ」

ロジーナと伯爵、フィガロはそう呟いて困惑する。戻って来ていたバルトロは目を顰めさせていた。

「風邪ではなかったのか？」

「風邪！？」

バルトロのその言葉を聞いたバジリオは目をしばたかせる。

第二幕その七

「誰がですか？それでしたら先生の専門分野では？」

「では見て宜しいですか」

「ええ、どうぞ」

「では貴方を」

バルトロはここでバジリオに言う。するとバジリオはまたしても目を丸くさせるのだった。

「私ですか」

「違いますか？」

「いや、全然」

首を横に振って述べる。

「この通り全く以って元気です」

「あれ、おかしいな」

話が矛盾しているので彼は首を捻った。

「何が何だか」

「あの、先生」

咄嗟にフィガロが動く。

「じゃあ髭を」

「おっと、そうだった」

言われてそちらを思い出す。

「それじゃあ頼むよ」

「はい、今すぐ」

「ではロジーナさん」

何も知らないバジリオはいつものようにロジーナに声をかける。

「レッスンを」

「それはもう終わりました」

伯爵が化けている音楽教師が慌てて彼に告げる。

「ですから貴方はもう」

「あれ、君は」

見慣れない顔なので今度は彼を見て目を丸くさせるバジリオであった。

「誰かな」

「それは後で。とにかくですネ」

「必死に取り繕う。」

「終わりましたから」

「はあ」

「あの」

伯爵はすぐにバルトロにも告げた。

「彼にはすぐに帰ってもらいましょう」

「またどうして」

「手紙のことです」

顔を顰めさせて述べる。

「そのことで何も知らない彼が迂闊な行動に出たら大変です」

「アルマヴィーヴァ伯爵の耳に入るか」

「そうです、ですから」

そう嘘をつく。

「ここは彼には」

「わかった。しかしだ」

フィガロが髭剃りの用意をする横でまた言う。

「先生」

「はい」

バジリオに対して声をかける。バジリオもそれに応える。

「熱がおりとのことですが」

「熱ですか」

「はい。御機嫌は如何ですか？」

「私は別に」

「ややっ、これは大変だ」

医者のようなこともやっているフィガロがバジリオの顔を見て声

をあげる。

「この顔色は。麻疹のものだ」

「麻疹！？私が」

「そうです。ですからここは」

バルトロを差し置いて必死に言う。

「お休みになられては」

「そうですわ、先生」

ロジーナもフィガロに加わる。

「ここは是非」

「何が何だか」

「薬代ですっ」

伯爵が化けている音楽教師は彼に財布を握らせた。

「ですからすぐに」

「そうですね」

何か話に飲み込まれたバルトロも何となくそんな気になってバジリオに告げる。

「お休みになられた方が宜しいかと」

「この財布を持って」

「その通り」

伯爵がその言葉にうん、うんと頷く。

「ささ、もう」

「よくわかりませんが皆さんが仰るのなら」

財布はかなり重かった。それを手の中で感じて上機嫌の彼は皆の言葉を受け入れることにした。麻疹ではないつもりだが金を貰ったからそれで満足していたのだ。

「今日はこれで」

「ゆつくりとお休み下さい」

フィガロはやけに恭しく彼に言う。

「ごゆつくり」

「今日はそのまま」

「お休みになられて」

続いてロジーナと伯爵も。フィガロに合わせて。

「先生、気をつけられよ」

バルトロは医者としての言葉だった。

「麻疹は命に関わりますからな」

「それは存じておりますが」

そもそもバジリオは麻疹ではないので一連の言葉に懐疑的だった。

「まあ今日は英気を養ってきます」

「それもいいですな」

フィガロはいい加減に返す。

「それではさようなら」

「はい、さようなら」

バジリオは一礼して家を後にする。そうするとフィガロ達はようやく安堵の息を漏らした。まずはフィガロがバルトロに対して言うのだった。

「ではお髭を」

「うん、頼むよ」

二人でまた部屋に入る。こうして伯爵とロジーナはまたしても二人になったのであった。

第二幕その八

「どうなるかと思ったわ」

ロジーナはほつと胸を撫で下ろして言う。

「いきなり来るんだから」

「こっちも参ったよ」

伯爵も彼女と同じ表情でそう述べる。

「けれど。これで危機は去った」

「ええ」

ロジーナは彼の言葉に頷く。

「それでいいものが手に入ったよ」

「いいものって？」

「これさ」

先程フィガロにもらったバルコニーの鍵を見せる。

「鍵！？」

「そう、君の部屋のバルコニーのね」

伯爵は満面に笑みを浮かべて言う。

「これで何時でも君に会える」

「じゃあもう」

「そうさ、僕達は勝利を収めるんだ」

「待ってるわ」

ロジーナは熱いまなざしで恋人を見て言う。

「何時でも」

「そうだね、もう何時でもいいんだ」

伯爵も言う。

「勝負はついたんだから」

「あの、ちよつと」

この時だった。いきなりバルトロが部屋から出て来たのだ。髭はまだ剃りかけだ。後ろからフィガロが慌てて追い掛けて来る。

「ちょっと待って下さいよ」

「我慢がきんのだ」

バルトロは焦りきった顔で彼に言う。

「我慢できないってもうすぐですよ」

「もうすぐでもそれでもだ」

その焦りがさらに強くなっていた。

「もれたらどうするのだ」

「けれどですね」

「とにかく今は我慢がきん」

そう言っ自分の部屋を出る。するとそこで伯爵とロジーナが甘い話をしていたのである。それでトイレに行きたいという気持ちは完全に消え去りかわりに怒りがこみあげる結果となったのであった。人の身体とは実に不思議にできているものである。

「今夜ね」

「そうさ、今夜さ」

二人はバルトロに気付かず見詰め合い話をしていた。

「今夜行くから。いいね」

「ええ、待っているわ」

「今夜だと」

バルトロはそこまで聞いて言うのだった。

「あっ」

「しまった」

「しまったではない。もう遅いぞ」

慌てて自分の方を振り向いてきた二人に対して言う。

「何もかもな。さて、どう弁明するのかね？」

「弁明とは」

「何のことか」

「だから誤魔化しても無駄だと言っているのだ」

怒りをさらに含ませた言葉であった。

「さあ、弁護士を呼ぼうかそれとも」

「待つて下さいよ」

後ろからフィガロがバルトロを抑えようとする。

「そんなに怒らないで」

「では一つだけ言おう」

三人に対しての言葉だった。

「今すぐわしの目の前から消える。いいな」

「伯爵」

フィガロはその言葉を聞いて伯爵に囁いた。

「今は」

「仕方がないか」

「はい。幾らでも挽回は利きますので」

「わかった。それじゃあ」

二人は撤退しロジーナもすぐに部屋から消えた。バルトロも一旦家を出てバジリオを呼びに行く。暫く二人の女中が掃除をしていたがすぐにバルトロとバジリオが戻って来たのであった。

「もういいぞ」

「それじゃあ」

「これで」

ベルタ達は引つ込む。そうしてバルトロはバジリオとテーブルに向かい合って座り何があったのかを事細かに説明するのであった。

「では知らないのか」

「全く何も」

バルトロはバジリオに答える。

「今始めて聞きました」

「ドン・アロンソ。では一体誰なのか」

「それは私が聞きたいです」

バジリオは困惑した顔で言葉を返すのだった。

「全く以って」

「うつむ」

「それにですね」

バジリオは言葉を続ける。

「私はそのドン・アロンソなる人物の素性を警戒しております」
「わしもだ」

二人は深刻な顔で言葉を交える。

「誰なのか」

「あのリンドーロではないですか？ いや」

ここでバジリオの推理が動いた。眉を顰めさせたところから知恵が出て来た。

「彼こそ。伯爵なのかも」

「アルマヴィーヴァ伯爵か」

「そうです。そうであれば大変なことです」

「そうだな」

そう話している外で雨音が聞こえてきた。それもかなりの音である。

第二幕その九

「雨ですな」

「そうだ。急がなくては」

バルトロは焦った顔で述べる。

「今のうちに公証人を呼んで」

「ロジーナさんと結婚されるのですか？」

「そうだ。駄目か？」

「それは難しいかと」

バジリオは外の方に顔を向けて答える。

「この雨ですから。嵐ではないですか」

「しかしだ」

「それにですね」

バジリオは言葉を続ける。

「公証人さんは今日は駄目ですよ」

「どうしてだ？」

「フィガロさんのところに御用があるんですよ」

バジリオはそう述べる。

「フィガロの！？」

「何でもフィガロさんの姪御さんが結婚されるそうで」

「馬鹿な、そんなことは有り得ない」

バルトロはそれをすぐに否定した。

「あいつに姪はいないぞ」

「何とつ」

バジリオはそれを聞いて口を大きくさせてしまった。その細長い顔がそれによりさらに細長く見える。まるで茄子のようになっ
まっている。

「初耳ですぞ、それは」

「いや、まさか」

ここでバルトロの推理も働いた。珍しいことに。

「その姪というのはまさか」

「ロジーナさん」

二人はすぐに気付いた。気付いて愕然となる。

「大変ですよ、それ」

「そう思うな、早いうちに手を打たないと」

彼等は言い合う。

「これはいかん、先生」

「はい」

バジリオはバルトロの言葉を受け取る。

「すぐに行ってくれ、いいか」

「わかりました」

力強く頷いた。

「それではすぐにでも」

「わしもわしで手を打とう」

「何か切り札があるのですな？」

「うむ、この手の中にある」

不敵ににやりと笑って答える。

「任せておいてくれ。では先生は」

「わかりました。外に出ますので」

「雨の中済まないな」

「報酬は弾んで下さい」

バジリオはにこりと笑ってそう返した。

「嵐の分は」

「わかった。いつもの倍だ」

「有り難うございます」

そんな話をしやすく立ち去る。バルトロは一人になるとすぐに部屋の鐘を鳴らした。そうしてロジーナを呼ぶのだった。

「ロジーナ、来なさい」

「はい」

ロジーナはすぐに降りてきた。バルトロは立ち上がって彼女に顔を向ける。その顔は異様なまでにここに、いやにやにやしたものであった。

「御前に渡したいものがあるのだ」

「何でしょうか」

「うむ、これだ」

ここで先程あの怪しげな音楽教師から貰った手紙をロジーナに手渡す。ロジーナはその手紙を見て怪訝な顔になった。バルトロはその顔を見ながら言葉を続ける。

「その手紙はな」

「ええ」

先程受け取ったそれはロジーナがリンドー口に渡したものである。それをどうしてバルトロが持っているのか大きな謎であった。彼女にとって。

「あの音楽教師と床屋は食わせ物だ」

「またどうしてですか」

「その手紙でわからないか。あの二人は御前を裏切ったのだよ」

「そうだ。だからこそそれがわしの手に渡り御前の手に渡る」

そう語る。そうしてさらに言葉を続ける。

「全てはな。あの二人は御前を騙していた」

「私を!？」

「この手紙をアルマヴィーヴァ伯爵に渡すつもりだったのだ。それをわしがり上げたのだよ。他ならぬ御前の為だね」

これは嘘だったがロジーナにはそれはわからない。彼女にとって都合のいいことに。

「嘘っ、そんな」

「わしは嘘は言わない。医者だぞ」

この言葉は嘘である。

「わかるな。御前は伯爵に売られるところだった」

「あの二人……」

ロジャーはその言葉を信じて怒りに震える。

第二幕その十

「許さない、こうなったら」

「どうするつもりなのだね？」

「復讐です」

一言であつた。

「それ以外にありません」

「そうか。では協力しよう」

「いえ」

だがその申し出は断るロジーナであつた。

「私一人で。何しろ今夜ここに來ますので」

「むむつ、そこまで計画していたのか」

その用意周到さにバルトロも閉口する。

「ますますもつて許せん」

「しかしそれは全て逆手に取られる宿命」

怒りに震える声で言い切る。

「この私によつて。ですから」

「では任せてよいな」

「是非共」

やはりきつぱりとして言い切る。

「ここは私により」

そう言い残し自分の部屋に戻る。バルトロは自分のすることがなくなつてどうにもこうにも手持ちぶたさになつたがとりあえず上手くいきそうだとわかり安心して部屋に戻つたのであつた。

その夜。伯爵とフィガロは嵐の中を進むのだった。二人の外套は完全に濡れそぼっている。もうそれだけで大変だがそれでも進む。フィガロの手にはランタンがある。

「もうすぐだね」

「ええ、そうですね」

フィガロは自分の後ろにいる伯爵にそう言葉を返す。

「いよいよですよ」

「もうすぐあの人に」

そう思うだけで心が昂ぶる。

「さあもうすぐだ」

「ほら、着きました」

ロジーナの家のバルコニーのすぐ下に来た。

「ここですよ。では」

「灯りが頼りにならないのが残念だね」

「仕方ないですよ、雨ですから」

そう言葉を返す。話をしながらフィガロはバルコニーにロープをかけてそのまま上にあがる。そうして伯爵も上がり二人はバルコニーのところにまで来たのであった。

「けれどまあ。ロジーナさんは御存知ですし」

「そうだな。それじゃあ」

「ほら、御覧下さい」

バルコニーが開いた。ロジーナが姿を現わす。

「ロジーナさんが」

「おお、ロジーナ」

「帰って」

ロジーナは怒った声でそう言うのだった。

「不埒な人よ、もう二度と」

「不埒！？私がかい」

伯爵は話がわからず目を丸くさせる。

「それはまたどうして」

「誤魔化すというの？」

さらに言葉の怒気を強くさせてきた。

「そうやって私を騙すのね、この悪党」

「これは一体どうしたことなんだ？」

「さて」

フィガロにもわからない。伯爵の言葉に首を横に振る。

「何が何なのか」

「貴方は私の恋人を装ってアルマヴィーヴァ伯爵に私を売るつもりなのですね」

「アルマヴィーヴァ伯爵に！？私が！？」

「話は聞きました。もう騙されません」

「馬鹿な、そんなことは有り得ない」

伯爵は今のロジーナの言葉に笑って返した。

「それだけはね」

「まだ白を切るのね」

「いや、切る必要もないことだね」

伯爵はそれも否定する。

「全く以って」

「何故そう言えるのかしら」

「何故なら私がそうだからだよ」

伯爵は笑って答える。

「えっ！？」

「だから私がそうなんだよ」

伯爵はまた答えた。

「私がアルマヴィーヴァ伯なんだ。今まで隠していたけれど」

「嘘、それじゃあ」

「はい、そういうことです」

フィガロもにこりと笑って伯爵の横からロジーナに言う。

「伯爵様は御身分を隠してロジーナ様のところに参ったのですよ」

「それじゃあ結局は私の」

「誤解はこれで解けたね」

伯爵は笑顔でロジーナに告げる。

「リンドーロは私で」

「アルマヴィーヴァ伯爵は貴方で」

「全ては誤解でしかなかったんだ」

二人は笑顔で言い合う。

第二幕その十一

「さて、それじゃあ」

「ええ」

二人は話を続ける。

「この幸福を二人で噛み締めて」

「そうして永遠に」

「さて、これでよしだね」

フィガロは笑顔で言い合う二人を見て自分も笑う。にこやかな笑みであつた。

「おいらのキューピットもいつもの冴えがあるつと」

「それでロジーナよ」

「ええ」

二人はフィガロさえ目に入らず話を続ける。恍惚とした中で。

「これから貴女をこう呼びたい」

「何て？」

「妻と」

ストレートなプロポーズだつた。

「貴女のことを妻と。それでいいかい？」

「ええいいわ」

ロジーナもその言葉をこの上ない晴れやかな笑顔で受け止めた。

「是非共」

「それじゃあ御二人共」

フィガロは恍惚となっている二人にまた声をかけた。

「決まりですね。楽しみは後で永遠にできますから」

「そうね」

「それじゃあ」

二人は彼の言葉に頷く。そうしてバルコニーから出ようとするが嵐がとてつもない勢いになっていてとてもではないが出て行けない。

ここは様子を見ることにした。

「困ったな」

「ええ」

ロジーナは伯爵の言葉に頷く。流石に何時までもロジーナの部屋にいるわけにはいかない。

その時だった。下からバルトロとバジリオの話し声が聞こえてきた。彼等の声を聞いて伯爵達はいよいよ切羽詰った顔になった。

「これは大変だ」

「どうしようかしら」

「いや、お待ち下さい」

だがここでフィガロが言うのだった。

「待つって何が？」

「若しおじ様達がこの部屋に来たら」

「どうももう一人いるようですね」

フィガロの耳はいい。彼等の話し声を聞き逃さなかったのだ。

「もう一人」

「それは一体」

「公証人です」

フィガロは言う。

「結婚の」

「じゃあ大変じゃないか」

「そうよ。このままだと私は」

「ですから」

フィガロはすました顔で二人に述べた。

「私の知っている公証人でございます」

「というと」

「まさか」

「ええ、そのまさかですよ」

すました顔のまま述べる。

「私達ので。というわけでここは堂々としていればいいのです」

「堂々と」

「左様。では降りましょうか」

二人はフィガロに言われてロジーナの部屋を後にする。そうして下にいるバルトロ達と会った。見ればやはりバルトロとバジリオの他に公証人もいた。役人のような格好をして何やら二人と話をしていた。バルトロは伯爵とフィガロがいるのを見て血相を変えた。

「何故ここにっ」

「まあまあ」

「まあまあではないっ」

「そうフィガロに言い返す。」

「君達、いい加減にしないと本当に警察を」

「公証人さん」

フィガロは怒り狂う彼をよそに公証人に声をかける。

「私の頼んでいたお話の用意は出来ていますね」

「ええ、既に」

「お話？」

バジリオは公証人がフィガロに伝えたのを見て目をしばたかせる。

「一体何の話なんだ？」

「では宜しく御願いますね」

「はい、アルマヴィーヴァ伯爵とロジーナさんの婚姻を」

「ちよつと待て」

バルトロは今の言葉に血相をさらに違う色に変えた。さながらカメレオンの肌の色をそのまま顔の色にしたようにめまぐるしく変わる。

「何時の間にそんな話が」

「既に進めていました」

「そんな話は聞いていないぞ」

バルトロは啞然とした顔で言う。

第二幕その十二

「何時の間にそんな話が」

「水面下で」

「ということはわしは一敗地にまみれたのか」

「わしも」

「いや、中々苦勞しました」

フィガロは笑って二人にまた言った。

「ここまでこじつけるのは。本当にね」

「しかしだ。伯爵は何処だ？」

「そもそもここにいるのか」

「目の前にいるよ」

その伯爵が今名乗り出た。

「リンドーロでもあり兵士でもあり音楽教師でもありその実態は」

「伯爵というわけかつ」

「まさかと思つたが」

「けれど。これで全ては明らかになった」

「ええ、愛もまた」

ロジーナはにこりと笑って伯爵に言うのだった。

「ここに実つたわ」

「さあ御二人さん」

フィガロはにこやかに笑ってバルトロとバジリオに声をかけた。

「ここは観念して」

「致し方あるまい」

「こうなつては」

二人は慚然としてフィガロの言葉に頷いた。頷くしかなかった。

「祝いましょう」

「二人の幸せをだな」

「そしてこれからの貴方達の幸せも」

「ふん、では今度は子供でも捜すわ」

「子供を？」

フィガロはバルトロのその言葉に目をしばたかせる。

「それはどなたでしょうか」

「以前内縁の妻との間にできた子だ。それでも探そう」

「宜しければ協力させて頂きますが」

「君の力だけはいらぬわ。自分でやる」

「全く。今度はこうはいかないぞ」

「さてさて。では伯爵、ロジーナさん」

フィガロはバルトロとバジリオの言葉を巧みに受け流し伯爵とロジーナに顔を向けた。二人はまたしても恍惚として顔を見詰め合っていた。

「これからは永遠に」

「うん、永遠に」

「愛と誠を」

二人はそれぞれ言う。この時はそれを信じていた。

「誠実でひたむきな愛こそが実るのです。この世で最も強いのは」

「愛と」

「誠ね」

「そうです。それでは皆さんその二つに対して」

フィガロはにこやかに述べる。

「祝福を」

「今ここに」

女中達も公証人もバルトロもバジリオもそれぞれの顔と声でその二つを祝う。何はともあれここではその二つが見事に実り勝利を収めたのであった。

2
0
0
7
.
9
.
1
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985g/>

セビーリアの理髪師

2011年4月28日00時57分発行